

## 第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

### 報告書資料 一般 - 79

学校名・団体名	京都市立葵小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	省察的問いを基にした「対話の時間」カリキュラム開発

#### 〈活動・研究の意義および活動報告〉

##### 【意義・目的】

本校の児童は、個の持つ知識は高いものの、集団の中で個の高まりを十分に実感できているとは言えない実態がある。そこには、地域コミュニティでの激しい学力競争等、子どもたちは「自分らしく在る」ことができにくい過プレッシャーの状況下におかれている。そのような中、地域とともにある学校は、児童の情緒面での成長を促し、社会に適応して生きる力を獲得する場としての役割を果たす必要がある。そこで、本校は、省察的問いを活用した対話スキルの向上に特化したカリキュラムを開発することで、この課題に対応したいと考えた。昨年度は「対話の時間」を設定し、試行的に全学年で対話力の向上に取り組むことで、安心安全の場としての集団を創造し、個人の知を更新し、深い学びへ向かう児童の姿が見られるようになってきた。そこで、今年度は、既習の対話スキルを次学年に活かせるよう、学年の系統性と教科横断的に活用する視点を加味し、探究学習カリキュラムと連動させた対話力向上を目指し、省察的な問いを基にした「対話の時間」カリキュラム開発をおこなうこととした。

##### 【活動内容】

「対話の時間」とは、対話スキルの獲得にとどまらず、獲得したスキルを生活科、総合的な学習の時間等を活用したプロジェクト型探究学習カリキュラムにおける活用を意図した時間である。したがって、「対話の時間」は「主体的・対話的で深い学び」を実現するための土台となる力を育成するための時間であり、対話により内省し共感することで、探究しようとする力の育成を目的とした。対話に関しては、これまでも「哲学対話」といった、一部の対話スキル向上を目的とする実践事例は他にもみられる。しかし、対話そのものを苦手とする児童にとって、哲学対話は取り組みにくい活動にもなりえる。そこで、本校では省察的問いを基に「自己探究型対話」「共創造型対話」「哲学型対話」の3つの対話スキルの獲得を目的としたカリキュラムを開発することで、児童の特性に合わせた対話力の向上を図るものとした。「対話の時間」で培った対話力は、プロジェクト型探究学習カリキュラムにおいて、児童が近隣の和菓子店や様々なステイクホルダーと共に地域社会に対して取り組みたいテーマを決める活動や、2020年の東京オリンピック開催を視野に、葵地域の良さを世界発信する活動で活用できるカリキュラムとした。

【省察的問いを基にした「対話の時間」カリキュラム】

本カリキュラムは全校児童 446 人（1 年生 75 人，2 年生 80 人，3 年生 81 人，4 年生 68 人，5 年生 68 人，6 年生 74 人）を対象にし，児童の発達段階と学年の系統性を踏まえて作成した。カリキュラムの開発・実施については，昨年度の試行実施から研究協力を頂いている外部講師と協働しておこなった。

平成30年度 「対話の時間」年間計画

テーマ	対話のタイプ	実施月	対象	活動内容	外部講師
私たちの教室をつくる	2	5月	2～6年	安心安全な気持ちでいられる学級をつくる。	・グラドルール設定
		9月	1年		
		6月	2～6年	主体的に自分を表現できる学級をつくる。	・ソロ、ペア、グループの設定 ・オープンクエスチョンとクローズドクエスチョンを使った話し合い
		10月	1年		
多様性から創る未来 (PBL学習)	2	6月	2～6年	これまで学んできた対話を振り返り，総合的な学習の時間で地域社会に取り組みたいテーマを決める。	・サークル対話 洪谷聡子氏 吉村春美氏
感情と相互理解	1	7月	2～6年	「自分の感情と大切にしたいこと(ニーズ)」を見直し，言葉にして語るができる。	・感情カード作成 ・人生の輪 ・自分はだれか？
		11月	1年		
		8月	2～6年	「相手の感情とニーズを認め受け入れること」を実践を通して学ぶことで，自己理解・相互理解を深めることができる。	・エンパシーサークル ・「怒り」の奥にあるもの
		12月	1年		
コミュニケーション	1	9月	2～6年	「自己共感と他者共感を大切に伝える方」「論拠を明確にして考えを述べる」「論点を明確にする」等，コミュニケーションの基礎を学ぶことができる。	・「話す」と「聞く」 ・お互いの話に耳を傾ける ・ものの見方(視点) ・意見の相違と合意 ・質問会議
対立から対話へ	2	10月	2～6年	対立となんかの違いを理解し，自分たちで建設的に解決する方法を学ぶことができる。	・3つの帽子 ・誤解について ・調停のためのステッププラン
		11月	2～6年	対立している両者のニーズを共に尊重し，「対立」から「対話」へのシフトを実践することができる。	・win-win解決 ・仲間外れ(擁護と排除)について
考える自由，表現する自由 (てつかく対話)	3	12月	2～6年	問いを立て，自由に思考する力，表現する力を対話を通して育むことができる。	・問いの立て方 ・サークル対話
		1・2月	1年		
違いは豊かさ (多様性への理解)	2	1・2月	2～5年	自分の家族・学級・学校・日本・世界の中で，共通するものや異なるものについて探究し，違いについてオープンな姿勢を取ることを学ぶ。	・目に見える違いと目に見えない違い ・ヒーローインタビュー ・違いから新たなものをつくる即興劇

※対話のタイプは，1:「自己探求型対話」，2:「共創造型対話」，3:「哲学型対話」を示している。

【活動の成果】

昨年度実施した「対話の時間」の成果として，今年度実施した全国学力学習状況の調査児童質問紙「自分に良いところがある。」に対して「当てはまる」と回答した児童が，全国平均 41.2%に対して，本校では 74.0%と 33 ポイントも高い数値を示した。これについて同様の質問を全児童対象に学校評価でも行った結果，前期・後期ともに「自分に良いところがある」の項目で，80%程度の児童が肯定的な評価を示しており，全校児童の自己肯定感が高まったことが明らかになった。このことは，授業時間中の児童の学習活動にも，顕著に表れており，主体的に学ぶ意欲につながっていると言える。また，児童にとって安心して学べる学級集団が創造されているともいえる。今年度は，「対話の時間」において学年の系統性を持たせたカリキュラムを開発すると共に，地域課題解決型のプロジェクト・ベース型探究学習と連動させることができた。さらに，教職員・保護者の対話の時間を設定し，教師や保護者と言った立場を超え，一人の人として関わり・つながりを尊重しながら合意形成することのできる対話プロセスを実現することができたことは大きな成果であった。このつながりは，今後，地域コミュニティの活性化，延いては，児童の学力向上につながるものであると期待している。